

未分化癌 1 例, 肺癌よりの印環細胞癌 1 例, 未分化癌 1 例, 大細胞癌 1 例, 甲状腺癌よりの未分化癌 1 例, 血管腫 1 例であった。

以上の教室例についての診断及び治療, 予後につき良性群, 悪性群に分けて検討した。

9. 実験的頭部血流遮断による脳低酸素血症での頭部表面冷却効果

(第 2 外科)

○井原 寛・関 由紀夫・宮崎 和哉・
岡崎 武臣・木村 恒人・倉光 秀磨・
織畑 秀夫

臨床的に人間の脳虚血最大許容時間は 3~4 分と言われている。それ以上の時間では, 脳は不可逆性変化を来し, いわゆる植物化あるいは脳死の状態に陥る。この 3~4 分という時間は, 臨床的に経験する事はあがるが, 文献的にも正確に記載されたものは少ない。

そこで犬を使用し, 実験的にどの位の時間の脳虚血で不可逆性変化をきたすか, また頭部冷却という低体温法と代謝抑制という面では同様だが, 全身冷却という大掛りな装置を使わず, 気軽に簡単に行ない得て, 中枢神経を直接冷やす事に注目し, 頭部表面冷却により脳低酸素血症による不可逆性変化を来すまでの時間が延長できないものかと考え実験を行なった。

脳低酸素血症の作製には頭部へ流入する血流遮断法を採用し, 完全脳虚血犬を作り出す為に, 準無菌の開胸操作にて大動脈起始部の遮断を行ない, 遮断時間を 3 分より 15 分まで延長し, その後の生存実験にてコントロール群を作り, 次に不可逆性変化を来す遮断時間 11 分での頭部表面冷却の効果を見た。不可逆性変化の評価としては, 実験動物である為, その behavior, 血圧動態, 人工呼吸器からの離脱, 脳波などを利用した。

犬の実験では, 脳虚血最大許容時間は 6~10 分とされているが, 本実験でも 3, 5, 7, 9 分遮断では不可逆性変化は起こしにくかった。遮断時間 11 分で, コントロール群は 33% にしか開眼, 立位歩行動作が見られなかったが, 頭部冷却群では 80% に開眼動作が見られ, 60% に立位歩行が可能であった。実験頭数は少ないが, 頭部表面冷却の効果が幾分にも認められた為ここに報告する。

10. 出生前に診断し得た脳形成不全の 1 例

(母子総合医療センター)

○中島由美子・大平 篤・岩下 光利・
田辺 清男・中林 正雄・諸橋 侃・
田中あけみ・仁志田博司・山口規容子・

坂元 正一

(産婦人科)

瀧沢 憲・吉田 茂子・武田 佳彦

最近我々は, 出生前超音波検査にて側脳室後角が大きく脳形成不全を疑い, 分娩後確診, 現在 follow up 中の症例を経験したので報告する。症例は 27 歳産婦で既往歴に特記すべきことはない。家族歴は, 母に脳溢血と父に高血圧があるほか特記すべきことはない。昭和 59 年 2 月 13 日から 4 日間の月経を最終に妊娠した。近医にて妊娠管理を受けていたが, 妊娠 29 週の時, 超音波検査にて頭蓋内 echo free space を発見され, 妊娠 34 週に当科初診した。初診時内・外診にては異常なく, 妊娠中毒症などの症状も認められなかった。超音波検査にて児の発育, 胎盤には異常を認めず, BPD (児頭大横径) の拡大, Midline echo の偏位, 第 3, 第 4 脳室の拡大も認めなかったが, 両側側脳室後角に相当する部分が非対照に echo free space として描出された。1 週間後の再検にても同様の所見が得られたが, 胎児心拍監視装置にて心拍数などの異常は認められなかったため, 軽微な経過観察のもとに妊娠継続とし, 分娩様式も経膈分娩, 産科的異常があれば帝王切開とする方針とした。妊娠 38 週 3 日に陣痛発来, 8 時間 23 分で 3,124g の男児を正常分娩とした。児の Apgar score は 1 分後 9 点と良好であった。生後 2 時間で新生児超音波検査を施行したところ, 第 3, 第 4 脳室に異常はないが, 両側側脳室後角が大きく描出された。CT にて超音波検査と一致する所見を得, 脳形成不全による水頭症と考えられた。全前脳胞症の不全型が最も疑われたが, 全身的・神経学的に異常を認めず, EEG にても明らかな異常なく生後 6 日間で退院した。その後, 十カ月検診にても特に神経学的異常を認められていない。

本症例の如く, 出生前から, 側脳室後角のみが大きくことが診断され, 生後, 神経症状が明らかでなく長期 follow up される例は非常にまれである。今後の発育を小児保健外来で厳重に観察していきたい。

11. 顔面のしびれ感および味覚障害が先行した Kennedy-Alter-Sung 症候群の 1 例

(神経内科)

○北原 恵子・北村 英子・小林 逸郎・
竹宮 敏子・丸山 勝一

(糖尿病センター内科) 大橋 博

Motor Neuron Disease (以下 MND) においては一般に知覚異常を伴わないとされている。今回, 我々は顔面の知覚異常および味覚障害に引続いて球症状,